

〈研究ノート〉

北欧男女共同参画事情キーワード

杉本千恵

Chie Sugimoto : Keywords on the Situation of Men and Women's Partnership in Northern Europe

はじめに

本稿は、筆者が平成12年10月、鳥取県男女共同参画状況調査団員として、フィンランド・スウェーデンを視察した際に感じたこと、学んだことについての覚書である。

この視察の主目的は、調査名の示すとおり、男女がともに互いを尊重し、自己実現を目指していきいきと活躍する男女共同参画社会を目指し、北欧諸国から学ぼうとするものであった。調査内容は、ア 家庭・地域における男女共同参画推進のための啓発施策 イ 家庭における男女共同参画の実践、ウ 仕事と育児・介護の両立支援策 であった。

調査旅程は、9月30日から10月8日までの9日間で、実質、視察・訪問を行ったのは5日間である。その5日間に、一般の家庭への訪問を含めて、政府委員会、市役所、女性団体、一般企業、保育所、中学校、など11箇所を訪問し(表1参照)、各視察先で様々な話を聞くことができた。尋ねたい内容については、事前にファックスで送っていたため、各訪問は限られた時間であったが、効率よく、ときには本音の部分まで聞き取りできたように思う。

本調査の団員は計6名で、国際女性の地位協会会員として女性の地位向上のために活動している人、

県男女共同参画推進会議の委員を勤める人、市の女性交流室アドバイザーで、子育て支援活動などに熱心に取り組んでいる人、農業改良普及部で女性の立場の向上に努めてきた人、旅館の女性経営者、と日頃から男女共同参画社会の実現を目指して、積極的に社会活動されている面々であった。

一方の筆者は、正直なところ、応募時点では男女共同参画という言葉を実味を持って考えたり日常生活の中で実践しているという状況ではなく、団員に選ばれたと聞いて驚いてしまった。ただ、応募の動機の作文と試験時の面接において、私なりにこの調査に応募した理由を書き述べていたので、その動機に期待されての選抜だろうと思ひ、しっかりと学び、調査しなければと、気持ちを引き締めた。

筆者が、北欧でぜひ観たい、聞きたいと思ったのは、男女のそして人々のパートナーシップのあり方である。施策・制度面よりむしろ、個々の気持ちの持ち方、考え方に興味があった。そして、筆者自身の関心に加え、日本や鳥取とは異なる新しい価値観を学生たちに紹介し、若い世代に新しい感覚を知ってもらいたいと思ったのが、直接の応募理由であった。

また、筆者は、多文化主義政策をとる国や、多文化共生を目指す社会などに興味を持っているため、男女共同参画社会の実現をその視点をも含み入れて

表1 調査日程・訪問先

月日	訪問国	都市	訪問先等
9月30日(土)			鳥取空港発、成田空港泊
10月1日(日)	フィンランド	ヘルシンキ	成田空港発、ヘルシンキ空港着
10月2日(月)	フィンランド 〃 〃	ヘルシンキ 〃 〃	男女平等委員会 ダイケアセンター(カンピ保育所) ホームビジット(2家庭に別れて)
10月3日(火)	フィンランド 〃 〃	エスボー 〃 ヘルシンキ	エスボー市役所 ダイケアセンター(キタニッテン保育所) フィンランド女性権利運動同盟
10月4日(水)	フィンランド スウェーデン	ヘルシンキ ストックホルム	市内見学、ヘルシンキ空港発 ストックホルム空港着
10月5日(木)	スウェーデン 〃	ストックホルム 〃	社会保険庁 ツムラーレ・コーポレーション(スウェーデン支店)
10月6日(金)	スウェーデン 〃 〃	ストックホルム 〃 〃	シャスピー中学校 育児休暇中の男性 ホームビジット(2家庭に別れて)
10月7日(土)	スウェーデン フィンランド	ストックホルム ヘルシンキ	市内見学、ストックホルム空港発 ヘルシンキ空港経由
10月8日(日)			成田空港着、羽田空港へ 羽田空港発、鳥取空港着

捉えようとしている。男女共同参画社会といったとき、男女という二極で社会を捉えるのではなく、個々が自立し、それぞれの立場が尊重される社会の実現が目指されるのだと思う。筆者のその考えが、北欧を視察することで明確なものになるように思われたということも、志望の動機である。

本調査の報告書は、調査後、6名で協力して練り上げ、平成13年2月に完成した。本稿は、従って、筆者個人の調査動機に対して得られた答・調査内容をキーワード別にまとめたものである。

1. 自立

フィンランド・スウェーデンでは、個人主義が人々の考え方のベースだということを随所で感じた。まず、子どもは高校を卒業した時点で、親元を離れて自活することが普通である。中学校を訪問した際にも、18歳で親から精神的に自立できる子どもを育てることが教育目標の一つだと明言された。ま

た、将来、年老いて介護を必要とする身になったとき、子どもに面倒をみてもらいたいかという問いに対し、ほとんどがNoであるようだ。(介護・高齢者福祉については国の果たす役割と考えられている。)親離れ、子離れがしっかりとできている印象を受けた。

また、夫婦の関係も同様に個人主義的と言える。税制については、世帯単位ではなく個人課税方式になっており(フィンランド1970年、スウェーデン1971年より)、制度的には、夫婦がともに働くことを社会が肯定しているといえる。もちろん、後述するように、子どもを持った共働き夫婦のための、育児休暇制度、保育サービスも充実している。

個人主義的夫婦の関係ということ言えば、フィンランド・スウェーデンではカップルが結婚という形式にこだわるのがなくなっている。多くのカップルが、籍を入れることなく、日本でいうところの「同棲」または「事実婚」というかたちをとり、

子どもが産まれてもそのままであることが増えている。(フィンランドではこの同棲はsamboと呼ばれとても一般的なカップルのあり方である。現大統領タルヤ・ハルネン氏も長く夫とはサンボカップルであった。)結婚と同棲は法的に顕著な差はほとんどない。(相続に関しては、同棲者から生まれた子どもは母親からの相続のみを受ける権利が認められ、父親の相続を受ける権利がない。しかし、市役所で父親であることを証明するための申請を行えば、父親からの相続も受けることができる。)

また姓名に関しては、別姓に加え、自分の名字を残しての複合姓を選択することも可能で、自分の望むアイデンティティに一番近い形での姓名、ライフスタイルが選べることになる。

親子、夫婦の関係などに関して家制度的な側面が残り、社会においても集団主義的な考え方がなされることの多い日本では、個々の自立という点については、なかなか同様にはなりえないかもしれない。しかし、北欧から学べる点は多い。

個々がまず、精神的・経済的に自立すること。親子、カップルも個々の集まりが基礎である。そのうえで、それぞれが、能力を十分に発揮し、その個々の力の集合体が社会をつくりあげる。社会はそのための制度面でのサポートをする。以上のような構図がみてとれるように感じた。

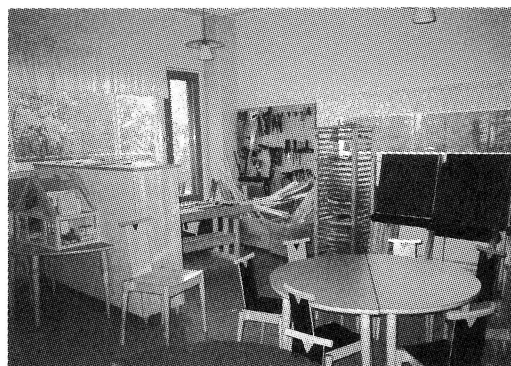
2. 個性

2つ目のキーワード「個性」の尊重が、ジェンダーフリー社会の実現、あるいは教育の大切な要素であるということ、特に保育所の視察で感じた。

フィンランドで2つの保育所を視察したが、共通して園長先生が話されたのは、個々の子どもたちの個性をいかに尊重し育むかということである。共働きの親が多いフィンランドの子どもたちは、必然的に保育所で過ごす時間が多い。従って、保育所でのEdu-care (Education+Care) が重要になる。入園時に保護者と交わす育児契約書では、その子どもに対する教育、指導目標がしっかりと話し合わせ設定



夢中になって遊ぶ子ども達。



キタニッテン保育所の工具室。
本物に触れることにより膨らむ想像力。

される。

視察した保育所の一つ、カンピ保育所では、一人っ子の子どもが多いことを配慮して縦割り保育を行い、異年齢の関わりをなかで育ちあっていく環境づくりがなされていた。

また、この保育所では、言語障害を持った子どもたちを通常の子どもたちとともに受け入れており、子どもたちの間では全くそのことを意識させないで過ごさせる。一方で、専任の言語療法士がおり、個々の子ども別のプログラムが生まれ、毎日療法が行われている。

視察した2つの保育所から受けた印象は、とにかく明るく、カラフルで、広々として楽しそうな部屋や設備の様子である。コンピュータや大人が使用するものと同様の工具を置いた工作室などが設置され、子どもを子ども扱いしていない点にも感心させ

られた。

事前に我々が考えていた質問項目には、ジェンダーフリーを意識した環境づくり、指導方針について問うものや、家庭でのジェンダーの刷り込みに対してどのように対処しているか、などという設問があった。しかし、視察で実際に話を聞き、子どもたちの姿を見ていると、そのような質問は愚問に近いと思われた。男、女を意識しない教育ではなく、男女に関わりなく個性の伸長を尊重する教育なのである。

この頃、日本で取り組まれるようになった子どもたちに対するジェンダーフリー教育についても、この視点で考えていく必要があるように思った。

3. パートナーシップ

男女共同参画社会の実現を考えると、女性の社会参画を積極的に奨励していくことと同様に、男性の家庭参画についても同様に推し進めていくことが必要である。

スウェーデンでは、パパクォータ制と呼ばれる父親のみが取れる育児休暇（30日）があり、約8割の男性がこの育児休暇を取得している。（両親の育児休暇全450日の390日は父親母親のどちらかがとつてもよく、残りの60日は各30日ずつ割り当てられ譲り合えない。360日は、給与の80%が保障される。）ストックホルムの社会保険庁の話では、パパクォータの30日を50日に増やすことを検討中とのことであった。この制度は、男性、父親に対して家庭参画を進めるポジティブ・アクションと言えよう。

このように国ぐるみでの制度面での充実化はさることながら、今回の調査で話をきいたカップルの、家庭での男女共同参画に対する自然な取り組みに感銘を受けた。

旅行手配業の企業を訪ねた際、話をきいた方々の一人である男性社員ポールさんは、育児制度の短時間育児休暇（育児休暇は時間単位で取得可能）を利用して1日の業務の75%（7.5時間勤務のうち5.5時間勤務）を働いていた。妻はフルタイムの仕事についた



カールさんとの面談の様子。



スウェーデンで訪問したモラストさん一家。夫婦の今の悩みは二人だけの時間が持てないこと。

ばかりなので、自分の方が育児休暇を利用、家事についても多めにこなしている。もし第二子が生まれたら、育児については、2人のキャリアのバランスを考慮して話し合っ決めてたい、とのことであった。

また、ノーベル賞受賞者の晩餐会が行われることで有名なスウェーデンのストックホルム市庁舎で面談したカールさんは、第一子のときは7ヵ月（奥さんは9ヵ月）、第二子のときに6ヵ月（奥さん7ヵ月）の育児休暇をとっている。この理由に、カールさんは、互いのキャリアのバランスなどもあるが、一番は子どもと過ごす時間を確保したかったことを挙げ、「子どもがハイハイしはじめるととても面白くて、妻が育児休暇を取るといったら、喧嘩してでも自分が取ったと思う。」とおっしゃっていた。

スウェーデンのホームビジット（家庭訪問）で話を聞いた御夫婦は、ご主人はコンピュータのエンジニア、奥さんは弁護士で、2人の子どもがおり、奥

さんは75%時短育休、ご主人は週に40時間の労働時間を調整し、週に2日は早帰りという変則的な勤務形態を組み、二人で子育てに関わるようにしているとのことだった。

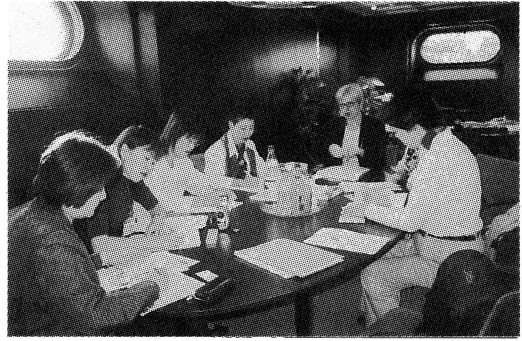
仕事・キャリアと、家庭・子育て。パートナーシップを組んだカップルが大切な両輪を共に取り組めるように、対話を重ね、協力しあっている姿がとても印象的であった。フィンランド・スウェーデン両国で、ベビーカーを押して散歩をする男性の姿や、保育所に迎えにくる父親などの姿を頻繁に見かけた。両国では、子どもに対する父性と母性が子育てに対等にきちんと注がれているように思われた。生物学的に生殖器官を持ち出産を行うのは女性であるが、カールさんは、「立ち会い出産をしたので一番に子どもと対面したのは自分。だから子どもとの絆では負けない。」とおっしゃっていた。

日本も、男性＝仕事ではなく、父性すなわち父親が子育てに関わりたいという自然な気持ちをサポートできる社会の雰囲気づくりが目指されるべきであろう。また、カップルが対等に個々の自己実現のために、話し合い、協力していくパートナーシップの精神も見習いたい。

4. コミュニケーション

人と人が互いを理解しうために欠かせないのがコミュニケーションである。男女間の理解においても、コミュニケーションが重要なキーとなろう。この視察で、北欧での夫婦・家族間のコミュニケーション、あるいは教師と保護者や、会社での上司・部下間でのコミュニケーションが積極的に図られていることがよくわかった。

また、筆者にとって、男女のコミュニケーションの活性化に取り組んでいるとも見て取れるのが、フィンランド・スウェーデン両国のクォータ制度である。これは、議会を始め委員会・審議会などにおいてどちらかの性が少なくとも40%を占めなければならないという制度である。スウェーデンでは1994年、フィンランドでは1995年に導入されたこの制度



フィンランド男女平等委員会にてオンブズパーソンメキネン氏の話聞く。

は、女性の参画の自然増には時間がかかるということで、ポジティブアクションの一環として取り入れられたものである。これまで男性の価値観を中心に話し合わせ、取り決められていた物事が男女がともに意見を出し合い改革されつつある。

また、スウェーデンでは1984年、フィンランドでは1987年から導入されている男女平等に関するオンブズパーソン制度は、男女平等法に照らしての不当な扱いや差別などの相談に応じるものである。これは女性のみが対象ではなく男性も対象になっており、フィンランドでは最近では全体の相談件数の30%が男性からの相談となっている。相談があった場合、オンブズパーソンが仲介を行い、和解に至るが、解決できない場合は裁判になる。

性差に関する不当な扱いに関して、日本では公にされなかったり、両者の話し合いがなされない場合も少なくない。オンブズパーソン制度などの制度面での充実も望まれるが、個々が、摩擦や問題を正面に見据え、解決のために対話を重ねる姿勢が大切であろう。異なった考えや立場の者同士が、コミュニケーションを通して互いの立場を理解し合っていく姿勢が、男女共同参画社会あるいは多文化共生社会の基礎の一つではないかと思う。

5. 多文化共生

スウェーデンの中学校（シャスビー中学校：生徒13～16歳約300人）を視察し、「生徒個々の文化、個

性を尊重した男女平等教育、多文化主義的教育」という一環した教育方針に共感した。

この中学校は、「男女平等教育プロジェクト」に取り組んだ全国8つの指定校のうちの一つであり、全教職員が通産省主催の男女平等教育の会議に参加している。男女平等教育や性教育のための特別な時間枠は基本的にない。「全教職員が、全ての授業、全ての場面で男女平等を意識して生徒に接しています。」と校長先生が話された。

一方、市郊外の団地の中に位置するこの中学は、アフリカ、中東、東欧、アジアなどからの移民の子どもが8割を占める。伝統的な性別役割分担が強い両親が多く、クラスルームには様々な文化、価値観が混在しているようだ。

このような生徒の文化背景から、先生方は、ジェンダーフリー教育に関しても、多文化主義の視点を大切にしていることを強調された。例えば、全国的な方針で男女が一緒に行うことになっている体育や家庭科の授業においても、一部のクラスでは移民の子どもたちの意見を尊重し、男女別で実施しているとのことであった。また、性教育では、男女の違いやパートナーシップについて学ぶことに加え、同性愛の人の講演を聞いたりする機会を持ち、様々な価値観の人を尊重する姿勢を指導している。

平等だから何もかも一緒というのではなく、生徒の多様な価値観を尊重して、細やかに対応していることに感心させられた。色々な文化背景の子どもたちの差異に配慮する姿勢と、男女という性差に対し



シャスビー中学校でのカフェテリアでの昼食風景。

での配慮が、特別なこととしてではなく、日々の学校教育の中で自然に取り組まれているようであった。

フィンランド・スウェーデンには、障害者手帳は存在しないそうである。シャスビー中学校のように、多文化主義的に物事を捉える教育を受けた子どもたちが社会を担っていくこれらの国では、高齢者、障害を持った人、外国人など日本では別枠で扱われがちの人々も、なんら特別な存在ではなく、それぞれの個性を持ち合わせた社会の構成員ということになるのだろう。

ジェンダーフリー社会とは、男女の間にある必要のない心の垣根、あるいは制度・慣習という垣根をとりはらい、個々がそれぞれの立場や違いを尊重し、個性を発揮していく社会であり、その方向性は、多文化共生社会のあり方と相通ずるものだと、この視察で実感することとなった。

6. 教育

最後のキーワードに「教育」を挙げる。差異と尊重を重んじた中学校の教育については前述したが、やはり、新しい世代に新しい知識・発想を直接伝える場所、新しい価値観をともに語れる場所、それが教育現場であると感じた。

シャスビー中学校では、毎年一週間設けられるヘルスウィークに、男子生徒は産婦人科を訪れ、実際に分娩台にあがってみるそうである。この機会にパートナーに対する思いやりの気持ちを学ぶことになる。また、例えば語学の授業で、「ベッドメイキングをしますか」という例文が出てくると、家庭で誰がベッドメイキングをするか、などとディスカッションを膨らませていく。文化背景によって異なるそれぞれの家庭の価値観を知り、家庭での役割分担についてどうあればよいかを皆が考えることになる。

成人女性、男性への意識改革を促す啓発的な研修も大切であろうが、やはり若い世代へ新しい価値観を伝えていくことが新しい社会を築くためには必要

不可欠であろう。こうした日々の学校教育の中で、子どもたちは前の世代とは異なる価値観を取り入れていくのだとしたら、教育の果たす役割は非常に大きい。ジェンダーフリーの精神を現在の日本で自然に受け止めてもらう素地づくりには、実践的な教育の取り組みがなされていくことが必要であると切に感じる。

それゆえに、筆者を含めて教育に携わるものが、全ての授業、全ての場面において、男女平等、多文化共生を意識して生徒・学生に接していくことが望まれる。教育者に対する研修の充実なども今後検討されていくことが必要であろう。

おわりに

今回の視察で、フィンランド・スウェーデンでは、男女平等の社会を実現していくための体制づくりにおいて、また、人々の男女のパートナーシップについての考え方において、とても自然に片意地はることなく、取り組まれていることに感銘を受けた。一方で、男女共同参画先進国と言われるこれらの国でも離婚が多いことや、女性に対する暴力など、抱えている問題は少なくない。今回は北欧から

学ぶための視察であり、日本の状況について話し意見交換することはあまりできなかったが、日本と共通する問題について、今度は逆に日本からヒントを伝えることができたらと思う。

また、視察を通して、重厚で歴史を感じさせるストックホルム市庁舎や、古い協会や石畳の道といった、落ちついた佇まいの町の風景が印象に残った。継承すべきものは大切に受け継ぎ、そして必要な部分においては新しい価値観を受容し変革していく、という新旧のバランスがうまくとれているように感じた。

ホームビジットで話を伺った御夫婦も、仕事と家事・育児の分担をカップルで調整し、一つ前の世代とは異なる新しい家族観を持つカップルであったが、その一方で、祖父母の代から受け継がれているダイニングテーブルを修理して大切に使ったり、自分たちのルーツを子どもたちに伝えたいからと、家族代々の写真を部屋に飾っていた。

日本が北欧から学ぶことは、新しいことだけではないように思う。日本の目指す男女共同参画社会にとって、また個々の生活、人生にとって大切なものの優先順位について今一度考えてみたいと思った。